様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３３８０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０５８９

研究課題名（和文）帰国児童のためのリテラシー教育

研究課題名（英文）Literacy Education for Japanese Returnee Children

研究代表者
谷口　正昭（Taniguchi, Masaaki）

静岡産業大学・情報学部・准教授

研究者番号：６０５３３２１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究により、以下２点の成果が得られた。(1) 帰国後の日本語及び第二言語によるリテラシー能力は、二言語を併用する子供たちが日常的に行う読み書きの活動と密接なつながりがあり、語彙の多様さ、構文の複雑さ、構文の正確さ等にも影響を及ぼしていた。 (2) 日本語、及び第二言語による読解査定において，さまざまな方略を効果的に用いることができたバイリンガル児童は、質の高い読み書き活動を日常的に行っており、それを支援する家庭環境が備わっていた。つまり、バイリンガルの子供たちの言語保持には、「家庭」が重要なドメイン（領域）となっている。

研究成果の概要（英文）：The research presents a case study of 13 Japanese returnee children in order to investigate whether any social factors affect their biliteracy skills. Based on results obtained through individual reading conferences, the study reveals that (1) Social factors such as the children‘s literacy engagement are the immediate contributing factors that affect returnee children’s language skills including lexical diversity, syntactic complexity, and syntactic accuracy in the two languages . (2) Reading is a valuable method of maintaining and developing the two languages, both in terms of their literacy skills and the effective use of reading strategies . Also, the home is an important domain for maintaining L2 literacy, especially when more recreational and socio-interactional uses are emphasized.

研究分野：日本語教育

キーワード：バイリテラシー　帰国児童　言語保持　バイリンガル　読解力　帰国子女教育史

１．研究開始当初の背景

多文化・多言語社会としての日本が抱える様々な問題を考える上で、帰国児童についての議論は欠かせない。かつてこのような子供たちは、日本の教育現場において、徹底的な同化を求められていた。しかしその後、徐々に高度な語学力が評価されるようになり、現在は、海外で得た多様な価値観を生かし、学校や社会において活躍することが期待されている。それに伴い、帰国児童の言語教育も 30 年以上に及ぶ「試行錯誤」の時期を経て、新たな局面を迎えている。

文部科学省は「海外勤務者等の子女で、引き続き１年を超える期間海外に在留し、帰国した児童・生徒」を「帰国子女」と定義しており、その数は年間約一万人とされる。こうした子供たちのことばの保持や発達をどう考えるかが、近年、学校という枠を超えた大きな社会問題となっている。子供たちの現地語能力（第二言語能力）については、渡航時の年齢や現地滞在期間、本人の性格や言語適性等、様々な個人的要因により差異は生じるものの、帰国後の言語保持・伸長は、概して困難なものとなっている。

研究者はこれまで、言語教育に関わる研究に従事しており、また帰国子女をはじめ、多様な言語・文化背景をもった家庭に育つバイリンガル児童を対象に，外国語の保持や文化に対する理解を育成する支援活動に携わってきた。このような経緯から、バイリンガル児童の言語能力には、外国語を用いたリテラシー活動の量や質、またそれを支える家庭環境といった社会的な要因が深く関わっているとの知見を得ている。しかし、これまでのバイリンガル児童を対象とした研究は、海外で獲得した言語の喪失（主にそのプロセス）に焦点が置かれ、滞在年数や帰国時の年齢といった比較的数値化しやすい要因が扱われることが多かった。こうした現状を踏まえ、本研究では、バイリンガル児童の言語能力をリテラシーという観点から捉え、彼らを取り巻く社会的環境を俯瞰した上で、言語保持に関わる要因について更なる検討を行った。

２．研究の目的

本研究は、海外生活を通じて第二言語（英語）を習得したバイリンガル児童を対象とし、帰国後の言語の習得・保持状況をリテラシーという観点から調査することを目的としている。本研究では主に、子供たちの読解能力に焦点を当て、子供たちが日常的に行う読み書き活動や、第二言語を用いた交友関係の維持、及びそれを支援する家庭環境（社会的要因）がどのようなものであるかについて検証した。また、海外における滞在期間や家庭環境が同一であった兄弟姉妹を比較することで、従来の研究で重視されてきた「年齢要因」に検討を加えることを主な目的とした。

３．研究の方法

調査は、バイリンガル児童の言語保持・伸長・喪失という観点から、以下のように行う。

（１）帰国児童を対象とする言語教育について、文献精査、また教育施設等の視察を行い、現状を把握した上で、その課題を明らかにする。具体的には、参考文献及び先行研究の調査・収集により、バイリンガル児童の言語保持・習得及び喪失の概要をまとめる。さらに，言語環境の変化からバイリンガル児童の言語能力を見た先行研究を概観する。

（２）バイリンガル児童に対し、継続的な読解力査定を課すことで、言語環境の変化が日本語及び第二言語、殊にリテラシー能力に及ぼす影響について考察する。また、

家庭環境、言語環境が同一、もしくは類似しており、在留期間や帰国後の経過年数に関しても差異がない兄弟姉妹を調査対象に加えることにより、帰国後の言語能力に影響する個人的要因である「帰国時点での年齢」についても検討を加える。

方法としては､帰国児童 13 名を対象とした言語調査を３か年にわたり行い, その結果を分析した。４－６週間毎に読解力査定を実施し、得られた言語資料を、児童の言語使用状況、中でも日常的に行われる読み書き活動の質や量に焦点を当てて、評価・検討した。

データ収集は, 米国で広く用いられている Developmental Reading Assessment を使用し、語彙の豊富さ、構文の正確さ、及び複雑さといった観点から分析を行った｡また、事後インタビューを行うことにより、児童が用いるさまざまな読解ストラテジー（方略）について検討を加えた。

（３）アンケート・インタビュー調査・フィールドワークを定期的に実施し、帰国児童を取り巻く言語環境を調査し、家庭や学校、その他の教育機関における第二言語の使用状況や学習状況を多角的に把握する。

４．研究成果

本研究により、以下２点の成果が得られた。

（１）帰国後の日本語及び第二言語によるリテラシー能力は、二言語を併用する子供たちが日常的に行う読み書きの活動と密接なつながりがあり、語彙の多様さ、構文の複雑さ、構文の正確さ等にも影響を及ぼしている。

（２）日本語、及び第二言語による読解査定において, さまざまな方略を効果的に用いることができたバイリンガル児童は、質の高い読み書き活動を日常的に行っており、それを支援する家庭環境が備わっている。つまり、バイリンガルの子供たちの言語保持には、「家庭」が重要なドメイン（領域）となっていることが明らかとなった。

複数言語を身につけた児童に対する教育は今、転換期に来ている。学校教育の中での位置づけにおいても、単に既存の教科教育的枠組みの中に押し込めるという時期は過ぎ、帰国児童が海外で獲得してきた言語や文化を「資源」として高く評価する動きが見られる。帰国児童の言語能力の育成に関しては、未だ各家庭に大きく委ねられているのが現状であるが、今後は、学校教育においてもバイリンガル児童の言語能力を保持・伸長していく教育体制の始動が期待される。その際、本研究で明らかとなった「読み書き活動」や「家庭環境」の重要性は、複数言語を習得した児童に効果的な言語教育を施す上で、大きな示唆を与える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 谷口正昭、谷口ジョイ、「帰国子女パイオニア校における初等英語教育史－60～80年代に焦点を当てて」、『静岡産業大学情報学部研究紀要第 18 号』、査読有、35-46.

〔学会発表〕（計１件）

① 谷口正昭、谷口ジョイ、「Literacy Retention in Japanese Bilingual Children」、JALT2015（全国語学教育学会）第 41 回国際年次大会（国際学会）、2015 年 11 月 23 日 静岡県コンベンションアーツセンター／グランシップ(静岡県)

〔図書〕（計１件）

① Joy Taniguchi and Masaaki Taniguchi 、(2016)“Language Retention And Development in Japanese Returnee Children”、 In Komaba Language Association 編『グローバル時代の外国語研究』、MAYA consortium、57-99.

②

③

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：

発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
谷口　正昭（TANIGUCHI MASAAKI）
静岡産業大学　情報学部　准教授
　研究者番号：60533213

(2)研究分担者
(　　)

　研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

　研究者番号：